

研究班番号【 57 】 生徒の声から考える理想の学校

保健班: 近藤菜月、安達愛子、橋本奈歩

Abstract

The purpose of this study is revealing the "ideal school image." As we pursued this goal, we found it is difficult to change our school in the short term, and we need to change ourselves.

Furthermore, the experiment shows whether or not there are motivation and stress relief methods. Therefore, this study concludes that to create the place we share information about motivation and stress relief methods approach for "ideal school image".

要約

本研究の目的は「理想の学校像」を明らかにすることである。追及していくなかで、学校を変えることは短時間での実現は難しく、自分たち生徒が変わらなければならないことが分かった。また、アンケートからモチベーションやストレス発散法の有無が重要であると考えられる。従って本研究では、モチベーションの維持・ストレス発散法の確立といった情報共有の場を設けることが、理想の学校像へのアプローチだということが結論付けられた。

1. はじめに

日々の学校生活を楽しく送ることで勉強や部活にもより力を入れることができ、日々の生活がより充実するのではないかと考えた。そこで、学校生活をより楽しくて充実したものに変えていくために、生徒の理想とする学校像(理想の学校)を追求することにした。今回の研究では理想の学校を『実現可能な範囲の中で生徒が楽しくて行きたい学校』と定義した。

2. 研究手法

高津高校2年生を対象に2回に分けてアンケートを行った。

『アンケート1』(対象者171名)

- | | |
|--------------------|-----------------|
| ・学校に行く意味 | ・学校は楽しいか、何が楽しいか |
| ・学校に行きたくないと感じるか、理由 | ・学校の整えてほしい環境や設備 |

『アンケート2』(対象者142名)

- | |
|----------------------------|
| ・学校に行きたいか、モチベーションはあるか |
| ・学校に関することが原因で気分が下がったときの対処法 |

3. 結果

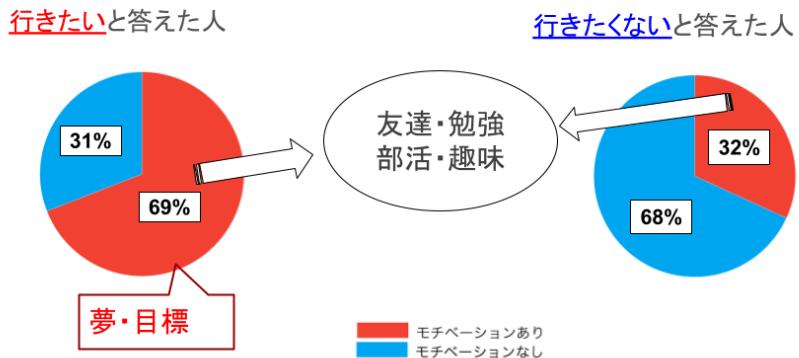
『アンケート1』

学校に行く意味としては、勉強や友達に会うなどが多かった。学校を楽しいと感じる人は80%で、休み時間や学校行事を楽しいと感じている人が多かった。その一方で76%の人が学校に行きたくないと感じたことがあった。理由としては勉強での疲労や気分が憂鬱であったり、眠気、人間関係などがあつた。また、学校の変えてほしい環境や設備については空調やトイレなどに関する要望が多かった。

『アンケート2』

学校に行きたいと感じている人の中でモチベーションがある人は65%、ない人は35%だった。また、行きたくないと感じている人の中でモチベーションがある人は35%、ない人は65%だった。全体的に、人間関係(友達など)や部活、趣味などをモチベーションとしている人が多かった。学校に行きたいと感じている人の中では、夢や目標、勉強などをモチベーションとする人も多かった。気分が下がったときの対処法としては、趣味に没頭する、家族や友人に悩み事を相談する、睡眠時間を長くするなどが多かった。一方で、特に何もしない、我慢すると答えた人も多かった。

◎学校に行きたいかとモチベーションの有無について



4. 考察

学校に行く楽しみが学校に行きたくない理由より大きくなることで学校が楽しくなると考えた。アンケート1で、学校に行く意味として多く挙がった、友人関係や学校生活の中で最も楽しいと感じる時間に多かった記念祭や遠足などの行事が学校を楽しくすることに有効だと考えられる。加えて、学校で変えてほしいこととして行事を増やしてほしいという声が多数上がったことから、友人関係と行事の活用化の例として学校行事を増やすことが考えられる。また、ストレスが少ない環境を作ることで、学校に行きたくない理由を減らすことに繋がると考えた。同じく、学校の変えてほしいこととして、空調やトイレなどの環境を整えてほしいという声が多かった。また、76%の人が学校に行きたくないと感じたことがあるが、勉強や授業についていためからそのうち97%の人が学校を休んでいなかった。このことも生徒のストレスになっていると考えられる。登校は必要ないが授業は受けることができるものの例として、オンライン授業などがいいのではないかと考えられる。このことから、学校が設備や生徒に合わせたオンライン授業などの環境を整えることでストレスを減らし、より楽しく快適な学校生活を送ることができると考えた。

アンケート1から考えられたことは実現が困難であったり、実現に時間がかかることが多かった。そのため、生徒の意識の持ち方を変えることで学校に楽しくて行きたくなる方法を考えた。アンケート2からは学校に行きたいと感じている人にある傾向として、モチベーションを持っているほか、夢や目標をモチベーションとしていたり自分のストレス発散方法を確立していたりする人が多かった。そのため、このことが学校生活を楽しく送ることに大きく関係していると考えた。

5. 結論

学校に行く理由の多くは、人間関係・行事といった「楽しみ」であることがわかった。このことから、それら「楽しみ」を増やしたりより良くしたりすることにより、学校に行きたいと思う生徒が増えると考えられる。また、生徒のストレスを減らすため、オンライン授業の活用も効果的であるといえる。しかし、これらのこととは短時間での実現が困難だと考えられるため、学校から生徒に焦点を変えて考えると、「モチベーション」と「ストレス発散」が重要だと分かった。そこで、生徒間での情報の共有を行える場を設けるといった策を提案する。モチベーション維持法、学校に行くことへの責任感、学校外の楽しみや趣味の具体例の共有…といった情報交換である。これは、短時間で実現可能であるといえる。そして、情報共有を繰り返し、生徒が他のものに目を向ける余裕を持つようになることで、行事・人間関係などのことに関する、実現に時間のかかるものに取り組むことができる。したがって、学校が楽しくて行きたいと思う生徒が増え、定義した「実現可能な範囲の中で生徒が楽しくて行きたいと感じる学校」に近づくと考えた。課題としては、各生徒が学校に求めるものは異なるため、定義や条件をより細かく設定し、理想の学校像を具体的に表現するほうが望ましいと考える。